

# 世徳堂本『西遊記』版本問題の再検討初探

——他の世徳堂刊本小説・戯曲との版式の比較を中心に——

上原 究 一

## はじめに

### 一、世徳堂本『西遊記』の伝本

百回本『西遊記』の現存最古の版本として広く知られるのが、秣陵陳元之の序が「時壬辰夏端四日也」と結ぶことから万暦20年（一五九二）の刊行とされ、一般に世徳堂本（または単に世本）と呼ばれている『新刻出像官板大字西遊記』20巻である。この所謂世本『西遊記』は、紹介された順に以下の四本の伝存が確認されている。

- （1）台湾国立故宮博物院図書文献處蔵本（高崎藩大河内家、村口書店、北平図書館旧蔵。以下「故宮世本」と略称）
- （2）広島市立中央図書館浅野文庫蔵殘本（広島藩浅野家旧蔵。後半50回分のみを存する。以下「浅野世本」と略称）
- （3）日光山輪王寺慈眼堂天海蔵蔵本（天海僧止旧蔵。以下「日光世本」と略称）<sup>（1）</sup>
- （4）天理大学附属天理図書館蔵本（京都槇尾山西明寺平等心王院旧蔵。以下「天理世本」と略称）

## 二、先行研究

(1) 世本四種相互の關係

日光世本が長らく原則非公開のため、四本を全て実見の上でこの問題を論じたのは長澤規矩也氏と磯部彰氏の二人だけであるが、両氏の説は正反對である。即ち、長澤規矩也『日光山「天海藏」主要古書解題』(日光山輪王寺、一九六六) 日光世本の項の「高崎藩大河内家から出て北京図書館に納めた本(上原注：故宮世本のこと)<sup>(2)</sup>」とは同版であるが、これはその後印補修本である。天理図書館藏本は更に後の印刷か。又、浅野図書館所蔵殘本(巻十一至二十)はこの本の覆刻本である」との見解に対し、磯部彰『『西遊記』資料の研究』(東北大学出版会、二〇〇七。以下『資料の研究』と略称)第五章「世徳堂刊西遊記の版本研究―明代における完成体『西遊記』の登場」<sup>(3)</sup>」では浅野世本を金陵世徳堂による初刻後印本とみなし、建陽の書林熊雲瀆がそれを重刻したものが日光世本、その後印本が天理世本で、故宮世本はそれを更に補修した版であると結論しているのだ。<sup>(4)</sup> 両氏の説で一致しているのは浅野世本と他の三本が異版であるという点だけで、異版二種の先後についても、故宮世本と同版の三本の中での先後についても見解が割れている。

(2) 刊行者をめぐって

一方、専ら比較的容易に見られる故宮世本を対象に行われて来た中台の研究を中心に、その各巻の巻頭第3行に記される刊行者が、基本的に「金陵世徳堂梓行」であるものの、巻9、10、19、20では「金陵榮壽堂梓行」(厳密には、巻19のみ榮を榮に作る)、巻16では「書林熊雲瀆重鏤」となっていることに注目した議論が多くなされてきた。

例えば、王重民『中国善本書提要』(上海古籍出版社、一九八三)が故宮世本は金陵世徳堂による初刻本ではなく熊雲瀆による重刻本と看做すべきだと指摘し、それを承けた方彦寿「熊雲瀆与世徳堂本《西遊記》」(『文献』一九八八年第四期)は、王氏が熊雲瀆を金陵榮壽堂の主人と看做したのは誤りで、熊雲瀆は『潭陽熊氏宗譜』に見える明末清初建陽崇化里の人で名を体忠、雲瀆は号である旨を明らかにして、故宮世本は建陽における重刻本であると唱えた。上記の磯部氏の説もこの系統に連なるもので、磯部氏は方氏の説に補正を加えつつ論を進めている(『資料の研究』211頁)。

なお、磯部氏は初め『『西遊記』形成史の研究』（創文社、一九九三。以下『形成史の研究』と略称）第12章「明後期における『西遊記』の大成とその流布」<sup>398</sup>頁において方氏の故宮世本重刻説を否定されていたが、当時は故宮世本と天理世本しか参照されていなかった。その後浅野世本と日光世本を閲覧された結果、『資料の研究』第五章の初出論文（注3参照）において見解を改めて故宮世本重刻説に与されるようになったものである。また、『形成史の研究』では天理世本を故宮世本の補修後印本と看做されていたが、見解を前述のように改めた理由は説明されていない。

また、『金陵榮壽堂』については磯部氏が『形成史の研究』第12章で唐氏世徳堂の同族で、初刻時から世徳堂と協力して版木を鑄工したとの推測をなされているが、自ら「確證は乏しいが」ともされている（395～397頁）。黄霖「関于『西遊記』的作者和主要精神」（『復旦学報』一九九八年第2期）は世徳堂本の前に榮壽堂本が存在した可能性もあるとする。更に、『古本小説集成』所収影印本の徐朔方「前言」（一九九四）では、故宮世本は巻ごとに世徳堂本、榮壽堂本、熊雲濱本の三種から成る配本であろうとの見解が示されている。謝文華「金陵世徳堂本《西遊記》成書考」（東華大学中国語文学系研究所碩士論文、二〇〇六）60～65頁では、これらを踏まえ、故宮世本は巻頭にどの書肆名を冠する巻にも他と字体の異なる葉が含まれていること、巻頭に世徳堂の名を冠する巻15の中だけで見ても版心の表記方法が葉ごとにバラバラであることなどを挙げつつ、世徳堂原刊本の版木が榮壽堂ないし熊雲濱の手に渡り、彼らの手で補修・補版を経て、全葉が同時に印行されたのが故宮世本であろうと考察している（榮壽堂と熊雲濱の先後については保留している）。

### （3）挿図に関して

四本とも、本文中のどこどころに、ある葉のB面と次の葉A面の2半葉に渡る見開きの図が挿入され、上部に版面の8分の1ほどの題字欄を設けて八十字程度の図題を記す。故宮世本は全197図、天理世本は全195図。浅野世本は故宮世本・天理世本の巻11以降と同じ99図を存するが、全て異版である。日光世本は、天理世本の図を影印し、それに見え

ない図や破損のある図は日光世本から補う瀧本弘之『中国古典文学挿画集成（二）西遊記』（遊子館、二〇〇〇）の掲載図面、及び同氏による同書解題「『西遊記』版本の挿画について」から判断するに、故宮世本と同じ197図のようだ。

瀧本氏は解題4頁で「本来二十巻一百回の構成で、各回に二図ずつを挿画として付するのであれば、二百図があるべきである。構成上区切りの悪い数字であることは説明が付かない。原刻本が金陵で刊行されたときには、二百図が付せられていたと考えるのが自然である。（中略）刊行された時点で残りの三図が存在していたのか、それは何らかの理由で残っていないのかなどの究明は今後の課題といえそうである」と述べている。

瀧本氏の参照されなかった故宮世本でも日光世本と同じ197図しか見えないので、両者とも刊行時点で197図しか存在しなかったと見てよからう。しかし、世徳堂原刊本でも同じ図しかなかったのか、それとも瀧本氏の推定通り200図あったのかは別の問題である。その意味で、初刻本説のある浅野世本も50回で99図しかないことは注意すべき点であろう。

また、故宮世本、天理世本、日光世本には刻工・画工の名が見えず、刻工・画工とも不明とされてきた。しかし、従来指摘が無かったようだが、浅野世本には画工名が残っている。即ち、巻13—3B（第61回第1図）の右端に、他の三本には見えない「王少淮寫」という署名があるのだ（後掲図9、24頁）。王少淮については後述する。

### 三、本論の目的と手法

本論は以上の諸問題につき、筆者がマイクロフィルムから全葉の複写を入手しえた故宮世本、天理世本、浅野世本について分析し、従来の議論をより深めようとするものである。しかし、原本を目撃出来たのが浅野世本だけで、日光世本に至っては『資料の研究』と瀧本氏前掲書に数枚ずつ掲載される若干の書影以外は未見であるという限界があり、遺憾ながら一気に結論を出せる態のものではないことは予めお断りしておく。

そこで本論では、謝氏の手法を一步進めて全葉の版心表記を調査し、金陵唐氏世徳堂が刊行した他の小説や戯曲の版

心の形式と比較しつつ、故宮世本、天理世本、浅野世本それぞれの性格を考察してみたい。なお、以下では同版である故宮世本、日光世本、天理世本の三種の総称として、記「熊雲瀨重鏤」本という名称を用いることにする。

## 第一章 唐氏世徳堂刊行の小説・戯曲の版心表記

### 一、小説

まずは唐氏世徳堂が刊行した他の小説や戯曲の版心や挿図の形式を押さえておこう。小説は以下のものを取り上げる。

(イ) 唐氏世徳堂刊本『南北両宋志傳』(国立公文書館内閣文庫蔵)<sup>(5)</sup>

南宋10巻50回、北宋10巻50回。南宋序末に「皆癸巳長至、泛雪齋敘」とあり、北宋序も「皆癸巳長至敘」と結ぶ。

癸巳長至は万暦21年(一五九三)夏至。各巻頭第2、3行に「姑孰陳氏尺蠖齋評釋／續谷唐氏世徳堂校訂」と見える(南宋巻3、10では「校訂」を「校梓」とする)。續谷は金陵の異称の一つである。

(ロ) 唐氏世徳堂刊本『唐書志傳通俗演義題評』(静嘉堂文庫蔵)<sup>(6)</sup>

8巻89節。序末に「皆(?) 癸巳陽月、書之尺蠖齋中」とある。癸巳陽月は万暦21年の陰暦十月。各巻頭第2、3行に「姑孰陳氏尺蠖齋評釋／續谷唐氏世徳堂校訂」と見える。

(ハ―1) 世徳堂原刊・周氏大業堂補修重印本『東西両晋演義題評』(北京大学図書館蔵)<sup>(7)</sup>

西晋4巻116則、東晋8巻231則。刊年不詳。<sup>(8)</sup>封面は「新刻全像／東西晋演義／大業堂梓」、序はもともと雉衡山人

夷白主人楊爾曾が刊行した12巻50回本にあったものの流用で、ともに世徳堂原刊本に付いていたものではない。西晋巻1第2、3行に「秣陵□陳氏尺蠖齋□評釋／續谷□周氏大業堂□校梓」とする(□は一字分の空格。以下同じ)。東晋巻1も同じ。他の巻は筆者未調査。

(ハ―2) 世徳堂原刊・周氏大業堂補修重印・再補修重印本『東西両晋演義題評』(中国芸術研究院戯曲研究所蔵)<sup>(9)</sup>

西晋 4 卷<sup>116</sup>則、東晋 8 卷<sup>231</sup>則。刊年不詳。封面無し。(ハ―1)と同じ序だが、署名は削られる。東晋巻 5〜8 の全葉を初めとして(ハ―1)と同版の本からの覆刻と思われる葉があるが(その場合、評は全く覆刻せず眉欄は空白)、全体的には世德堂原刊の版木をそのまま使っていると思しき葉が多い。第 1 葉が覆刻である巻では、本来の巻頭題「新鐫重訂出像註釋通俗演義西(東)晉志傳題評」から「註釋」の二字を削っている(該当葉のうち東晋巻 7 のみ「註釋」を残す)。各巻頭第 2、3 行に「秣陵□陳氏尺蠖齋□評釋□續谷□周氏大業堂□校梓」とする。但し、西晋巻 2、4 はどちらも記さず 2 行目から本文。また、「秣陵」を東晋巻 6 は「科陵」に、東晋巻 7 では「棟陵」に誤る。

(二) 世德堂原刊?・錢塘王慎脩重印?・清代補修再重印本『三遂平妖傳』(天理大学附属天理図書館蔵)<sup>10)</sup>

4 巻 20 回。封面は清代の再重印時の 40 回本からの流用、引は王慎脩による重刊の際に附されたもの。各巻頭第 2、3 行に巻 1〜3 は「東原羅貫中編次/錢塘王慎脩校梓」、巻 4 のみ「東原羅貫中編次/金陵世德堂校梓」とある。

(ホ) 唐氏世德堂刊本『新刻夷堅志』(国立公文書館内閣文庫蔵)<sup>11)</sup>

10 巻。文言小説集。封面「辛丑冬月(万曆 29 年、一六〇二)/夷堅志/唐氏世德堂梓」。各巻巻頭第 2 行以降は、巻 1「宋鄱陽洪□邁著/明姚江呂胤昌校/續城唐□晟訂/唐□景次」、巻 2 以降「宋鄱陽洪邁著□□□明姚江呂胤昌校/續城唐□晟訂(巻 4、8 では「續谷唐□晟詮」)/唐□景次」。續城は續谷に同じ。無図。

(ヘ) 唐氏世德堂刊本『新刻耳談』(台湾国立故宫博物院圖書文獻處蔵)

5 巻。文言小説集。封面あり、左右の幅広の欄に「重刻北京/原板耳譚」と大書し、その間の細い欄にやや小さい字で「金陵世德堂梓」。自叙末に「皆/萬曆丁酉(万曆 25 年、一五九七)孟夏上庚王同軌撰」。各巻巻頭 2 行目以降「黃岡王同軌行甫撰/上饒門生王嗣經校/金陵書坊世德堂梓」。無図。毎巻 17〜18 葉。

(ト) 唐晟・唐景刊本『耳談類増』(台湾国立故宫博物院圖書文獻處蔵)<sup>13)</sup>

54巻。(へ)の増補版。自叙に金陵で刊行する旨記されており最初の刊本と見られる。自叙末に「萬曆癸卯年(万曆31年、一六〇三)上澣王同軌撰」。世徳堂の名は見えないが、各巻巻頭2行目からを「黃岡□王同軌□行甫□著／滁陽□夏守成□克家□校／續谷□「唐□晟□伯成／唐□景□叔永」□梓」「」内は小字双行。「甫」は巻1のみ「父」に作る)としており、(ホ)と同じ刊行者と知れる。無図。毎巻6〜18葉。

その他、『續谷春容』12巻にも刊年不詳の世徳堂刊本があるが(毎巻巻頭第2、3行に「羊洛敕里□起北赤心子彙輯／建業大中□世徳堂主人□校鏤」と記す)、上下二層に分かつ版式の日用類書であるため取り上げなかった。

次項表1で版式と版心表記の原則、及び版心題・版心巻数の表記が乱れる葉を示し、次々項表2で各巻の葉数、それぞれの版心葉数の表記原則とそれが乱れる葉、及び挿図の数と署名について示す。表1には世本『西遊記』も含めた。(へ)(ト)は共通点が多いので表1では同欄にまとめ、無図かつ全20葉以上ある巻が無いいため表2には含めなかった。

表1でまず目に付くのは、(イ)(ロ)(ハ)の版式が殆ど一致しており、版心の体例まで揃っているということである。書名も『○○志傳題評』で揃えてあり、陳氏尺蠖齋なる人物の評を眉欄に掲げる点も一致している。この陳氏尺蠖齋は後述の世徳堂刊行の戯曲にも評釈者としてしばしば名が見えるほか、世本『西遊記』の序を書いた「株陵陳元之」と同一人物であることがほぼ確実視されている。<sup>14</sup>となると、やはり(ハ)にも唐氏世徳堂の原刊本があったことは確実と見てよからう。世本『西遊記』とは版式が異なり(イ)(ロ)とは一致すること、及び世本『西遊記』が万曆20年夏、(イ)が21年夏、(ロ)が21年冬という刊行ペースを考えると、それはおそらく万曆20年冬か、22年夏以降のそう遠くない時期の刊行だったのではなからうか。

また、世本『西遊記』の版式及び版心の表記法は、刊行時期が近い挿図本講史小説の(イ)(ロ)(ハ)や、今日では同じ靈怪小説に分類されるやはり挿図本の(ニ)のそれとは異なっており、意外なことに挿図の無い文言小説集で、刊行時期も少し離れた(ホ)(へ)(ト)とほぼ一致していることも目を引く。



表1 世徳堂刊小説の版式と版心、及び版心題・版心巻数の乱れ (□は一文字分の空欄、■は一文字分の墨格をそれぞれ表す。○には巻数の数字が、ホの△には十が入る)

版式 (上段) / 版心 (下段)	版心題・版心巻数の乱れ	版心最下段に「世徳堂刊」or「文字数」が現える全ての葉 (他の葉では空欄)
上段下文で、半葉 12 行 24 字+肩欄の1字で行5 字の序 四周双辺と紙辺が入り混じり、有界無界も相半ば、白口、単黒魚尾	南宋：巻 2-26 (南宋迄)、巻 4-21~24 (卷四)、巻 5-31 魚尾二分下がり) (五)、巻 8-13 (魚尾二分下がり)、14 (魚尾二分下がり) (八)、15 (□八)、16~19、21-22、28、30 (全て □□□八)、巻 9-7 (版心題なし)、北宋：乱れ無し	南宋：巻 1-20、21、23~32、巻 2-21~24、27、28、巻 3-1~12、巻 4-1~16、25、29、30、巻 5-1、9~12、巻 6-~なし、巻 7-なし、巻 8-1~12、巻 9-17~20、23、25、26、巻 10-27、28、33、34 北宋：序 1、2、巻 1-8、12、14、15、18~22、25~27、29、巻 2-5~7、9~14、17~20、25~28、巻 3-23、巻 4-7~18、巻 5-1~8、17~22、27、28、巻 6-1~12、15、16、21~28、巻 7-2~6、8、11、12、23、24、巻 8-1、2、4、7、8、22、巻 9-11、12、14、15、20~23、巻 10-1~4、7~10、13~16、19、20 序 1~3、巻 1-1~3、5~8、13、17、18、21~28、30、巻 2-5~28、30~36、53~56、巻 3-51、52、55、56、58、巻 4-7~18、18~34、37、38、43、44、49、50、巻 5-13~20、29~52、巻 6-1、2、5~10、12~14、20~24、45~55、59~65、巻 7-1~6、17~30、33~42、65、巻 8-31~33、42~48 西晋：巻 2-33、34、41、42 ※ (イ-2) では巻 3 最後の 2 葉にも見えるが、この本では見えないのが、それとも欠葉なのかは不確定。 東晋：巻 4-9、10、巻 6-20~32、巻 7-41、42、49、50、巻 8-41、49
上段下文で、半葉 12 行 24 字+肩欄の1字で行5 字の序 四周双辺・左右双辺・四周脚辺が混在、有界 (無界の有未讀題)、白口、単黒魚尾 「西晋志傳 (二分分空白) 【魚尾】 巻之○ (十字分空白) 葉數 (一字空白) 世徳堂刊」※ 「唐書志」まで肩欄の高さ	未讀題	西晋：巻 2-33、34、41、42、巻 3-63、64 3-20 (□之三一)、32 (□□三) 東晋：巻 6-1 (魚尾が二文字分下がる)、3 (魚尾無し)、巻 7-15 (魚尾二分下がり) (七巻)
上段下文で、半葉 12 行 24 字+肩欄の1字で行5 字の序 四周双辺・左右双辺・四周脚辺が混在、有界 (無界の有未讀題)、白口、単黒魚尾 「西晋志傳 (二分分空白) 【魚尾】 巻之○ (十字分空白) 葉數 (一字空白) 世徳堂刊」※ 「西晋志」の三文字は肩欄の高さ、東晋は版心題「東晋志傳」となる	西晋：巻 2-22 (卷二)、巻 3-20 (□之三一)、32 (□□三) 東晋：巻 6-1 (魚尾が二文字分下がる)、3 (魚尾無し)、巻 7-15 (魚尾二分下がり) (七巻)	西晋：巻 2-33、34、41、42、巻 3-63、64 3-20 (□之三一)、32 (□□三) 東晋：無し (イ-1 の該当葉とは全ての葉が異動)
半葉 9 行 20 字、四周脚辺、有界、白口、無魚尾 (巻 1 のみ黒魚尾がある葉あり) ※ 目録は巻ごとで、版心巻数ところが「目録」となる	巻 1-1、2、5~7、10~16、19 ~22 (以上を魚尾あり)、43 (佚傳・巻)、巻 3-19 (写刻三〇)、巻 4-14 (4巻■四巻)	巻 1-1 (范利三白)、2 (范利三百六十六)、5 (范利三百六十六)、6 (范利三百四十六)、11 (范利三百四十六)、12 (范三百四)、巻 2-32 (三百六十六)、33 (三百二十五)、34 (三百七十)、35 (三百一十)
半葉 9 行 20 字、四周脚辺、有界、白口、無魚尾 (巻 1 のみ黒魚尾がある葉あり) ※ 魚尾があるのには右に配す葉のみ、消滅との覆刻とされる巻 1 1 集中している	巻 1-14 (4巻■四巻)	巻 1-32 (一千四百十三)、34 (一千三百六十六)、35 (一千五百)、巻 3-8 (一千〇二)
「閑話志 (四分分空白) 【魚尾】 彙集〇巻 (五字分空白) 葉數 (三字分空白) 文字數」	版心題で「閑」と「談」がかり混じること以外は乱れ無し、「閑」と「談」について同一巻やでは殆ど統一されている。	※ 2 葉分の文字数のみ、? なら、巻 3-3 のみ葉数との間の空白が一字分しかない。
半葉 12 行 24 字、四周脚辺、有界 (無界の葉もある)、白口、単黒魚尾		(イ) (ハ) とともに無し
・ (イ) □耳端 (四分分空白) 【魚尾】 巻之○ (六字分空白) 葉數 ・ (ハ) 耳談類増 (三分分空白) 【魚尾】 巻之○ (七字分空白) 葉數		
半葉 12 行 24 字、四周脚辺、有界 (無界の葉もある)、白口、単黒魚尾		巻 11-40 (五百廿七)「浅野世世のみ」、41 (五百廿四)「浅野世本・天理世本」※ 改訂世本は同葉ともマニエロ掲載時の誤記により有無の判別不能
遊「田後西遊記【魚尾】 巻之〇〇 (七~八字分空白) 葉數 (三字分空白) 文字數」		



表2 世徳堂刊小説の版心における葉数表記、挿図

	各巻葉数と版心の葉数表記	挿図
イ	南芥: 全巻全葉「二五」式 巻1 (全32葉)、巻2 (全30葉)、巻3 (全31葉)、巻4 (全30葉)、巻5 (全31葉)、巻6 (全30葉)、巻7 (全30葉)、巻8 (全30葉)、巻9 (全30葉)、巻10 (全35葉) 北芥: 巻2—21 (二十一) を除き全て「十五」式 (但し、20 は二十とする) 巻1 (全29葉)、巻2 (全28葉)、巻3 (全28葉)、巻4 (全27葉)、巻5 (全29葉)、巻6 (全28葉)、巻7 (全29葉)、巻8 (全28葉)、巻9 (全23葉)、巻10 (全24葉)	・見開き式、右上に四角で囲って図題を記す。南宋32図、北宋44図。 原則として各回1図だが、南宋第4、49回は2図あり、北芥第5、9、15、20、44、49回には図が無く、 ・南宋巻1—4B「上元王少准親」、北宋巻1—8B「上元王少准親」、ともに右端に四角で囲って記す。どちらもその巻の最初の図。
ロ	巻1 (全48葉、三十五) 式、巻2 (全62葉、三十五) 式、巻3 (全64葉、20—39) は二十、三十を除いて「十五」式、40以降「二五」式、巻4 (全62葉、1は二、39までは「十五」式、以降五—、五五、五六と影印の際で判別不能な57—58以外は「二五」式)、巻5 (全66葉、1は二、39までは「十五」式、以降四、六五を除き「二五」式)、巻6 (全66葉、11は二、28までは「十五」式、以降四三、四四を除き「二五」式)、巻7 (全65葉、1は二、20—29「十五」式、30以降全て「二五」式)、巻8 (全57葉、三九を除き全て「二五」式)	・見開き式、右上に四角で囲って図題を記す。全65図。原則として各回1図だが、第9、40、46、52、89面に図が無く、第12面には2図ある (全89節)。 ・巻1—2B「上元王少准親」、巻4—2B「上元王少准親」、巻5—4B「上元王少准親」、巻7—1Bに「王少准親用、万人利、いすけも画面右端に四角で囲って記す。」「万人利」はその左端に「さな図を認めて記す。全てその巻の最初の図」。
ハ	東澤菰	・見開き式、右上に四角で囲って図題を記す。全90図。西晋巻1、2は各6図、西晋巻3、4は各8図、東晋巻1、7、8は各7図、東晋巻2、3、5、6は各8図、東晋巻4は9図。各回2図 (或いは何回ごとに1図) というような原則は見られないが、図が配置される葉の葉数は能く例外を除いてほぼ完全に揃っている。つまり、「各巻の第何葉は図」という原則で図を作成したものと思われる。
一	西晋: 二十、三十を除き39までは「十五」式、40以降「二五」式、1は二 巻1 (全50葉)、巻2 (全43葉)、巻3 (全64葉)、巻4 (全65葉、64、65をそれぞれ五五、五六に誤る) 東晋: 特別に注記のない巻では西晋と同じ葉数表記法	・基本的に(ロー1)と同じ図が同じ葉に配されるが、東晋巻5—8では図が全て省かれ、数字が連続するように版心葉数を振ります。(ロー1)の東晋巻4の最後の図(65B66A)も省かれ、やはり版心葉数が揃えられている (但し、65と66の葉数表記は左記の如く誤っている)。同じく東晋巻4の最初の図(1B2A)も無く、葉数を揃めているが(ロー1)の3が「二」に、その誤写は「三」が欠番となるところまでで、「四」から「五四」までの葉数表記が単に(ロー1)と一致する。
二	巻1 (全57葉) …十一〜十九を除き「二五」式、22、57b欠葉、23の葉数表記を「十二」と誤る 巻2 (全58葉) …十一〜十九を除き「二五」式、22、57b欠葉、23の葉数表記を「十二」と誤る 巻3 (全55葉) …全て「二五」式 巻4 (存46葉) …全て「二五」式、44及び47以降欠葉	・東晋巻1—2B「王少准親」、右端に四角で囲って記す。その巻で最初の図。 ・見開き式、各回1—3図。図題なし。明らかに北芥の修訂済みまたは複製らしき図もあれば、原則の趣を伝えたいような図もある。第1、4、7、10、11、12回は各2図、第13、19回は各3図あり。 ・巻1—8B右下四角隅まで「金剛観音南寶刹」、巻3—8A左下「金剛観音南寶刹」、巻4—12B右下「觀音寶刹」。前二者はその巻で最初の図。
ホ	挿図は無、ので、葉数表記についてのみ記す。巻1 (全62葉、十三、廿四、卅七、卅八を除き「二五」式)、巻2 (全52葉、全て「二五」式、67は六十七B)、巻4 (全61葉、卅三、卅四を除き「二五」式、1、11は二、十)、巻5 (全64葉、全て「二五」式)、巻6 (全60葉、30までは二、二二、二三、三十を除き「十五」式、40以降「二五」式、60は六十B)、巻7 (全61葉、38までは二十を除き「十五」式、39以降「二五」式、61は六十B)、巻8 (全66葉、二六、二一、二二、二三、廿七を除き「二五」式)、巻9 (全66葉、30までは二十を除き「二五」式、40以降「二五」式)、巻10 (全64葉、全て「二五」式、51は五二、64は六四全)	

そして、最低でも二度の補修重印を経ている（ハ―2）（二）も含め、版心題と版心巻数の表記は体例に非常に忠実に、表記が乱れる葉は数えるほどしかないことが表1から読み取れる。対して、表2から明らかのように、版心葉数の表記法の統一は殆ど図られていないようだ。同一作品内で各巻の表記原則がバラバラなことも珍しくなく、各巻内での乱れも多い。してみると、版心の葉数表記に統一基準が無いことは、唐氏世徳堂の原刊本であることを疑う根拠にはならなそうだ。逆に、版心題や版心巻数に乱れが多く見られる場合は、補修や重刻の可能性を疑ってかかる必要がある。

また、（イ）（ロ）（ハ）はいずれも図に王少淮の署名を持つ。してみると、浅野世本に見える彼の署名は世徳堂原刊本にあったものと考えてよからう（但し、それが直ちに浅野世本が初刻本であることを証明するわけではない）。なお、世本『西遊記』の挿図の風格が王少淮のそれに似ることは、実は従来から磯部氏（『形成史の研究』<sup>392</sup>頁）、瀧本氏（『前掲書解題4頁』）らにより指摘されていた。特に磯部氏の指摘は（イ）が世本『西遊記』と刊行元・序の撰者が同じであることを視野に入れた上で彼の参画を推定したもので、単なる印象批評ではない。卓見であったと言える。王少淮の署名はいずれも「寫」「寫像」「寫相」とし、「刊」や「刻」とするものは無いので、彼は下絵を担当した画工と思われる。王少淮の署名を持つ小説版本は浅野世本を含め他に三種が知られるが、いずれもやはり「寫」としている。<sup>15</sup>

その図であるが、原則として各回（節）1図の（イ）（ロ）でも、ともに図の無い回（節）や、逆に2図のある回（節）が含まれている。してみると、世本『西遊記』の原刊本も、必ずしも瀧本氏が予測されたように規則的に各回2図ずつの200図があったと考える必要はなさそうだ。つまり、浅野世本に99図しかないことは初刻本ではないと考える根拠にはならないし、故宮世本と日光世本に見える197図が初刻本にあった全ての図でもおかしくないことになる。

因みに、（イ）（ロ）（ハ）については、大塚秀高氏が「嘉靖定本から万曆新本へ」（注7所掲）において、世本『西遊記』を除く他の王少淮挿図小説二種も含めて、嘉靖年間に建陽で楊氏清江堂或いは清白堂から刊行された熊大木の撰になる通俗小説が、万曆20年前後に金陵で相次いで周氏または唐氏の書肆により挿図本として刊行され、それとほぼ同時

期に建陽の三台館・雙峰堂の主人余象斗からは上図下文本として刊行されている、<sup>(16)</sup>という流れに注目した比較を行っておられる。(イ)(ロ)はともに熊大木の撰になることが知られ、大塚氏は(ハ)にもその可能性を想定されるが、本論の趣旨に照らして重要なのは「書林熊雲濱」こと熊体忠が熊大木の同族の後輩に当たるということである(方氏前掲論文参照)。とあらば、金陵唐氏世徳堂は熊大木撰の小説を勝手に刊行したのではなく、その子孫筋である建陽熊氏と正式に提携してその「万曆新本」を刊行する一方、見返りとして自らが刊行した世本『西遊記』を重刊する権利を熊雲濱に与えた——そのような想定も許されるのではなからうか。

そうであれば、熊雲濱による重刻本『西遊記』の刊行は、(イ)(ロ)(ハ)が金陵で相次いで刊行された時期とほぼ同時期、つまり世本『西遊記』初刻本刊行の直後であった可能性が高い。謝水順・李珽『福建古代刻書』(福建人民出版社、一九九七) <sup>297</sup>頁に挙げる熊体忠(雲濱)宏遠堂刊本のうち刊行年代の分かるものが万曆5年、21年、22年、27年、30年であることも、記「熊雲濱重鐫」本の刊行が世徳堂原刊本のそれからそう遠くない時期と見ることの傍証となろうか。

## 二、戯曲の版心表記と挿図

次に戯曲について見よう(次頁表3)。「古本戯曲叢刊」第1、2、5輯に世徳堂刊本として収めるものから、版面に世徳堂の名が見えない「齊鳴記」を除いた七本を取り上げた(唐氏世徳堂刊行の戯曲は他にも数本が知られるが、未見)。このうち、刊年が分かるのは封面に「萬曆丙戌(万曆14年、一五八六)春月」と見える『断髮記』のみである。

表3で注目すべきは、第一に、同じ「唐氏世徳堂校梓」の戯曲であっても、「陳氏尺蠖齋」の訂釈(註釈)を掲げるものと、「游氏興賢堂重訂／程氏敦倫堂參録」とするもの、興賢堂の名はあるが敦倫堂の名は無いものではそれぞれ版心表記の基本体裁が違ふということである。そして、陳氏尺蠖齋と陳元之が同一人物であるとの前述の定説を更に裏付

表3 唐氏世徳堂刊行戯曲の刊行者名・版式・版心・図 (□は一文字分の空格を表す。図は全て半葉のみの扉面式で、上:12分の1ほどの欄に左右を墨模縁で飾った図題を配する)

扉題名	巻頭行作者など	版式	版心	全巻巻数、版心・葉数表記、版心表記に用いられる葉	図
『蘭氏狐見記』二巻	姑岡東氏尺鷹齋訂釋 續合唐氏世徳堂校梓 ※下巻では「姑岡東氏尺鷹齋訂釋」	上坪下文、半葉8行21字+1字で行6字の罫。左右及び基本だが、四周単辺り混じる。有界、白口、黒黒魚尾	「狐尾記」□ (魚尾) ○巻 (七〜八字分空白) 葉数 ※版心題は本文・字目の高さから	上巻 (全46葉)、葉数表記は39まで「廿五」式、40から「廿二」式、1、41が乙、四、 下巻 (全47葉)、葉数表記上巻に全く同じ。15Bが欠 (前後で文端縁ので、図がなかったものと見られる)	図題餘刻。上巻 25 冊、7 図、下巻 19 冊に存6 図
『蘭氏記』二巻	林氏尺鷹齋訂釋 續合唐氏世徳堂校梓	上坪下文、半葉8行21字+1字で行6字の罫。有界、白口、黒黒魚尾 混じる。有界、白口、黒黒魚尾	「蘭氏記」□ (魚尾) ○巻 (七〜八字分空白) 葉数 ※版心題の高さ同上	上巻 (全48葉)、葉数表記は廿五〜卅六を除き「廿五」式 下巻 (全43葉)、葉数表記は全て「二十五」式	図題餘刻。上巻 22 冊に7 図、下巻 17 冊に7 図
『蘭孝記』二巻 『蘭孝記』二巻 『蘭孝記』二巻	姑岡東氏尺鷹齋訂釋 續合唐氏世徳堂校梓 一巻・「蘭孝記」一巻	上坪下文、半葉8行21字+1字で行6字の罫。有界、白口、黒黒魚尾 混じる。有界、白口、黒黒魚尾	「蘭孝記」□ (魚尾) 巻之上 (七〜八字分空白) 葉数 下 (七〜八字分空白) 葉数 ※版心題の高さ同上	蘭孝記巻之上 (全41葉)、葉数表記は二、二八を除き「二十五」式 蘭孝記巻之下 (存37葉、第38葉以下欠)、葉数表記は25が二〇五に見えるが、他全て「二十五」式	図題餘刻。蘭孝記 17 冊に9 図、蘭孝記 存 15 冊に存7 図
『蘭孝記』二巻	星源所氏興賢堂訂釋 續合唐氏世徳堂校梓 海陽所氏教諭堂参縁 ※巻之二は全て無し	上坪下文、半葉8行21字+1字で行6字の罫。有界、白口、黒黒魚尾 混じる。有界、白口、黒黒魚尾	「本文」一頁目の高さから 五字分空白 (魚尾) 月半 記巻之 (四四字分空白) 葉数	巻之一 (全51葉)、葉数は一文字分のスペースに詰め込む。二、三、三十を除き39まで「廿五」式、以降「二十五」式 巻之二 (全55葉)、葉数は一文字分のスペースに詰め込む。二、三、三十を除き39まで「廿五」式、以降「二十五」式	図題餘刻。巻之一 25 冊で5 図、巻之二 18 冊で存5 図
『月亭記』二巻	星源所氏興賢堂訂釋 續合唐氏世徳堂校梓 海陽所氏教諭堂参縁 ※巻之二は全て無し	上坪下文、半葉8行21字+1字で行6字の罫。有界、白口、黒黒魚尾 混じる。有界、白口、黒黒魚尾	「本文」一頁目の高さから 五字分空白 (魚尾) 月半 記巻之 (四四字分空白) 葉数	巻之一 (全45葉)、葉数表記は全て「二十五」式 巻之二 (全44葉)、葉数表記は四十一、四十四を除き「二十五」式、影印本では補綴しつらいが1はミか? 8A欠 (前後から図だったと思われる)	図題餘刻。巻之一 25 冊で5 図、巻之二 18 冊で存5 図
『蘭孝記』二巻	星源所氏興賢堂訂釋 續合唐氏世徳堂校梓	上坪下文、半葉8行21字+1字で行6字の罫。有界、白口、黒黒魚尾 混じる。有界、白口、黒黒魚尾	「蘭孝記」□ (魚尾) 上巻 (七〜八字分空白) 葉数 ※版心題は本文・字目の高さから、巻数の上の一文字分空白葉も多い	巻之上 (全55葉)、全て「二十五」式、29、30、36、37、39、41、42、43で「巻」字を囲り字の右のように附字 (略記号?) とする。 巻之下 (全52葉)、五十一を除き「二十五」式で、21は二、五、8、13は葉数表記が紅葉より高、位置。同 13、14、33、34は版心題が他より下がり、上にも魚尾あり。	図題餘刻。巻之上 20 冊で12 図、巻之下 21 冊で12 図
『世孝記』四巻	星源所氏興賢堂訂釋 續合唐氏世徳堂校梓 ※巻之二以降は世徳堂のみ記載	上坪下文、半葉8行21字+1字で行6字の罫。有界、白口、黒黒魚尾 混じる。有界、白口、黒黒魚尾	「世孝記」□ (魚尾) 巻之 (七〜八字分空白) 葉数 ※版心題は本文・字目の高さから、魚尾の下に必ず白めがある。	巻之一 (全40葉)、三十三、三十五、四十四を除き「廿五」式 巻之二 (全44葉)、廿九まで「廿五」式、以下三十一を除き「二十五」式、5B欠 (図が)、 巻之三 (全40葉)、廿八まで「廿五」式、以下「二十五」式、1B、6B欠 (ともに図が)、 巻之四 (全39葉)、廿一〜卅六は「廿五」式、他は「二十五」式、1B、6A、11B、16A、27B、33B欠 (全て図が)	図題餘刻。巻之一 8 冊で6 図、巻之二 7 冊で存5 図、巻之三 7 冊で存3 図、巻之四 7 冊で存1 図

けるかの如く、表1に付記した世本『西遊記』の版心表記の体裁は、陳氏尺蠖齋の関わる戯曲でのそれにほぼ等しい。

出版に参画した人物により版式の傾向が分かれるというこの法則が、もしも戯曲以外の世徳堂刊本にも当て嵌まるとしたら、(ホ) (ト) ともに並んで名の見える唐晟(伯成)と唐泉(叔永)の二人が、両者と版式を同じくする世本

『西遊記』にもともに参画していた可能性が考えられる。そのうち一人はもちろん世徳堂主人、それはおそらく字から兄と思われ、常に先に署名する唐晟であろう。となると、或いは世本『西遊記』に見える「金陵榮壽堂」とは弟の唐泉であつたかもしれない。また、世本『西遊記』序、(イ) 南宋序、(ロ) 序に刊行者として名に見える「唐光祿」は、(イ) (ロ) が唐泉の名の見える諸版本と版式が違うことを踏まえると、唐晟の号ないし別字であろうか。<sup>(17)</sup>

第二に、小説の場合と同様に、葉数の記載法のバラつきはかなり多い。逆に、版心題・版心巻数の表記の統一は殆どの巻で完全に徹底されており、『還帶記』以外では乱れは全く見られない。その徹底ぶりは小説以上である。

第三に、游氏興賢堂のみと組んだ『還帶記』上巻に限り、巻数表記で「巻」字を踊り字か梵字のような記号で代用している例が確認出来る。これは、万暦から崇禎にかけての建陽刊本では非常に多く見られるが、同時期に金陵で刻された版本では極めて稀な現象である。しかし、これらの葉は他と少し字体が違っているように見えるし、更に第41、42葉には、上下巻を通して他の葉には必ずある評が一つも見えない。してみると、これ以外の戯曲では版心の乱れが一切見られないことも考え合わせて、金陵以外(おそらく建陽)で補刻された葉である可能性を視野に入れるべきである。これを世徳堂原刊本にも版心巻数の表記に略記号を用いることがある例として捉えるには慎重であるべきだろう。

第四に挿図についてだが、白話小説同様、戯曲においても巻ごとや齣ごとの図の数に規則性は見出せない。画工・刻工の署名は一切見られないが、王少淮と非常に良く似た筆致である。陳氏尺蠖齋の関わる白話小説の挿図が全て王少淮のものであることを考えると、少なくとも陳氏尺蠖齋の名を掲げるものに關しては王少淮写像である可能性を想定しても良いかもしれない。そうでないにしても、その同族など、彼と技術を共有する者の手によることはほぼ確実だろう。

## 第二章 記「熊雲瀆重鏤」本と浅野世本

### 一、記「熊雲瀆重鏤」本

本章では、前章で見た唐氏世徳堂刊の小説・戯曲の版式を念頭に置きつつ、記「熊雲瀆重鏤」本と浅野世本とを比較していく。まずは記「熊雲瀆重鏤」本について故宮世本によって示し、必要に応じて他二本での異同を記す（未見の日光世本については既に先学の紹介のある場合に限る）。なお、天理世本は基本的に故宮世本と同版だが、鳥居久靖「天理図書館蔵『新刻出像官板大字西遊記』覚え書」（『ビブリア』12号、一九五八）や『形成史の研究』<sup>393</sup>頁に指摘される通り、ところどころに故宮世本と異版の補刻と思われる葉がある（巻1を例に取れば、第7、8、27、44、45、46、47葉がそれに当たる）。故宮世本も謝文華氏の指摘通り各葉の字体は均一ではないのだが、故宮世本の中で明らかに異質な字体の葉について見ると、天理世本はそれと同版である場合もあれば（巻9第18葉など）、字体は似ているのだが良く見ると異版である場合もある（巻10第1〜6葉など）。故宮世本と同版の葉においては、殆どの葉で天理世本の方が印刷が濃く、字が若干太くなり、図においては細かい線が潰れてしまっているケースが目立つ。

### （1）封面・序・目

20巻100回、各巻均等に5回ずつを収める。まず秣陵陳元之撰の「刊西遊記序」5葉、次に目録6葉。

天理世本にのみ封面を存する。四周単辺の枠の中に二行に分けて「刻官板全／像西遊記」と大書し、その間にそれよりやや小さい字で「金陵唐氏世徳堂校梓」とし、魁星図の朱印が捺される。磯部彰『『西遊記』受容史の研究』（多賀出版、一九九五）の口絵にカラー写真が掲載されているので参照されたい。

### （2）本文

各巻巻首第1行に書名と巻数（各巻に邵康節「清夜吟」の詩句を一字ずつ冠して「×字巻○」と記す）、第2行に全

巻共通で「華陽洞天主人校」、第3行は「はじめに」で述べた通り巻9、10、19、20が「金陵榮（榮）壽堂梓行」、巻16が「書林熊雲瀆重鏤」、その他の巻（1、8、11、15、17、18）では「金陵世徳堂梓行」となっている。

半葉12行24字、四周单边、有界（無界の葉も）、白口、単黒魚尾。版心表記の原則は「画像西遊記【魚尾】巻之〇〇（七、八字分空白）葉數（三字分空白）文字數」（文字數は巻11第41葉に見えるのみ）。次頁表4で各巻の全葉數と欠葉、及び版心葉數の表記法について示し、次々頁表5に版心題・版心巻數が乱れている全ての葉とその詳細を示す。

まず表4だが、注記した巻1における葉數のずれ（原因は挿図の項で後述）を除いては、故宮世本と天理世本で異同は無い。葉數の表記原則は例によって各巻ごとにバラバラだが、巻内での統一度について見ると、巻1、4、8、17では乱れが多いものの、それ以外の巻では原則がかなり行き届いており、完全に徹底されている巻もかなりの數に上る。

次いで表5を見よう。巻3、9、10、11、14、19、20には版心題・版心巻數の乱れが皆無かそれに近いのに対して、巻4、15、18では十數もの葉で乱れがある。世徳堂刊本の他の小説・戯曲で版心題・版心巻數がこれほど多く乱れる例は他に無いから、記「熊雲瀆重鏤」本は、或いは少なくともそのうち版心題・版心巻數の乱れが目立つ巻は、世徳堂原刊の版本を用いた重印本ではなく、「重鏤」との記載通りに重刻であることを示す現象と考えられるのではなからうか。その中で、巻頭表記が「金陵榮壽堂梓行」の巻9、10、19、20が全て版心の乱れが非常に少ない巻であるのは目を引く。これらの巻は葉數表記の原則も「二五」式で揃っており、巻19以外の三巻ではそれが完全に徹底されている。

一方、熊雲瀆の名を冠する巻16を初め、巻6、7、12、15、18にも、「巻」字を踊り字のような記号で代用する例が散見される。前章で触れた通り、これはこの時期の金陵刊本には稀で建陽刊本に頻繁に見られる現象なので、熊雲瀆による重刻の際に生じたものである可能性が高い。

また、巻13、18、19、20に見られる巻數を記すべき位置が巻數ではなく幾何字模様になる例も、同様に建陽刻本にしばしば見られる特徴だが、「金陵世徳堂梓行」と記す葉、「金陵榮壽堂梓行」と記す葉とともにこれが見えることは注意



表4 故宮世本と天理世本的全葉数と欠葉、及び葉数表記

巻1	故は全61葉、天は全60葉、ともに廿三、廿四、廿六〜卅を除き「二十五」式。1のみ乙とし、他では全て一を用いる。 ※故と天は刊行時点で葉数が異なっていたと見て間違いない。 途中から版心葉数もずれるが、葉数の表記は共通。
巻2	全58葉、全ての葉で「二十五」式。1のみ乙を用い、他は全て一。 ※天の25、39は欠葉。
巻3	全64葉、廿と六四を除いて「二十五」式。1のみ乙を用いる。 ※故の55、56、64Bは欠葉。天の21、64Bは欠葉。
巻4	全64葉、廿七と廿八を除く五十二までと六十一以降が「二十五」式で、五三から六十までは「二五」式。1のみ乙を用いる。五五は他より二文字分高く、かつ一文字分のスペースに詰め込まれる。
巻5	全65葉、全ての葉で「二五」式。1、21、41、51では乙を、11、31、61では一を用いる。
巻6	全64葉、全ての葉で「二五」式。1、21（天は印刷應く不明）、31、51、61では乙、11、41では一を使用。三三と三四は一文字分のスペースに詰め込む。
巻7	全69葉、全ての葉で「二十五」式（但し、25は故天とも五しかはっきり見えない）。1のみ乙を用いる。8、故天とも葉数表記無し。27、故天とも十七に見えるが、少なくとも故はよく見ると二十七八らしい。
巻8	全67葉、二十〜三十と五十九〜六十一は「二十五」式、三乙から五八までと六三以降は「二五」式。62は故天とも「六二」しか見えないが、間に少しスペースがあり、マイクロからでは「十」の有無確定は困難。六三と六四は他より約二文字分高く、一文字分のスペースに詰め込む。31、41、51では乙、1、11、21、61では一を用いる。
巻9	全68葉、全ての葉で「二五」式。1、11、21、31、41、51は乙を用い、61のみ一を使う。8は天では印刷不明で葉数が見えないが、故ではA面に「八」の右面らしきものが穿うじて見える。
巻10	全64葉、全ての葉で「二五」式。1（故と天は異版だがどちらも乙）、21、31、41、51、61は乙を用い、11のみ一を使用。六十は他より一文字分高く、かつ一文字分のスペースに詰め込む。
巻11	全66葉、全ての葉で「二五」式。11のみ一を用いる。
巻12	全63葉、全ての葉で「二五」式。11のみ一を用いる。五五、五六、五七、五八、六二、六三は他より一文字分高く、一文字分のスペースに詰め込む。
巻13	全65葉、全ての葉で「二五」式。全て一を使い、乙は用いない。 ※故の60は欠葉。
巻14	全64葉、二十九を除き「二五」式。41のみ乙を使う。
巻15	全69葉、廿一、廿二、廿五、廿六、卅三、卅四を除き「二十五」式。乙は用いない。
巻16	全64葉、全ての葉で「二五」式。乙は用いない。※天の33は欠葉。
巻17	全64葉、三十まで「二十五」式。三乙からは廿七、卅八を除き「二五」式。1、11、31、61は乙を、21、41、51は一を用いる。
巻18	全61葉、卅四を除き「二五」式。1、21、31、51、61は乙を、11、41は一を用いる。 ※故の25は欠葉。天は61Bが欠。
巻19	全60葉、廿七・廿八を除き「二五」式。但し、29は故天とも「二〇九」となっている。11のみ一を用い、他は全て乙。 ※天の44、59、60は欠葉。
巻20	全62葉、全葉「二五」式。1、21、31、41、61は乙、11、51は一。 ※故天とも62は欠葉、殆ど心経の引用と巻末題だけの葉なので無くてもさほどの不都合は生じないが、浅野世本に存する他、藏部氏『資料の研究』によれば日光世本にも存するようだから、故天でもおそらく刊行時にはあったのだろう。

すべきである。これは建陽での熊雲瀆の重刻の際に世徳堂・榮壽堂の名がそのまま残されたことを示すが、それは熊雲瀆と世徳堂の間には業務提携があり、榮壽堂は世徳堂の共同刊行者だった、という先の推定の傍証となるまいか。

総じて、版心からは記「熊雲瀆重鐫」本が額面通り重刻本だと思われる例が多く見出せた。版心表記の乱れは特定の巻に集中しているから、それだけを見ると徐朔方氏の「巻ごとの配本」説を有力視したくなる。しかし、各巻巻頭の刊行者名も版心表記の乱れも故宮世本と天理世本で共通であるから、伝来過程での配本という可能性はまず考えられない。そして、版心表記の乱れが皆無な巻でも全葉が浅野世本と異版であり、しかもそうした巻は浅野世本でも版心の乱れが無い（後掲表6参照）ということを考え合わせると、やはり記「熊雲瀆重鐫」本は全巻が熊雲瀆による重刻で、巻頭の

表5 故宮世本と天理世本、版心題・巻数表記の乱れ

- ・版心表記の原則は「[出像西遊記□□/巻之○] [故は異版で版心通常] 葉数 (三字分空白) 文字数」(文字数は巻11第41葉のみに見える)
- ・まず「故」「天」でどちらの本での現象かを示し、続けて「問題のある葉数 (版心題/巻数表記)」という形式で記す。
- ・版心題は通常通り「[出像西遊記]」とする場合は省略。
- ・□は一文字分の空格を表す。「≡」は「巻」字の代わりに使われている、踊り字か梵字のような形の略字 (記号?) を示す。

巻1	天7 (出像西遊記□□/巻之-) [故は異版で版心通常]、天8 (出像西遊記□□/巻之-) [故は異版で版心通常]、故天42 (一卷)、故天43 (一卷)、故47 (一卷) = 天46 (一卷) <sup>ii</sup> 、故48 (巻数表記は見えず。但しマイクロ写り悪い) 天47 (一卷)
巻2	故天1 (□□□□/巻之二)、故天2 (西遊記□□/二巻)、故天5 (西遊記□□/二巻)、故天6 (西遊記□□/二巻)、故天7 (西遊記□□/二巻)、故天8 (西遊記□□/二巻)、故天34 ([出像西遊記] □ <sup>iii</sup> /巻之二)、故天42 (巻二)
巻3	故天とも乱れ無し ※但し、故は31以降版心題の部分の紙が破損しているらしく、確認不能な葉が多い。
巻4	故天25 (西遊記□□/巻之四)、故天26 (西遊記□□/巻之四)、故天27 (西遊記□□/巻之四)、故天28 (西遊記□□/巻之四)、故天53 (西遊記□□/四巻)、故天54 (西遊記□□/四巻)、故天54 (西遊記□□/四巻)、故天56 (西遊記□□/四巻)、故天57 (西遊記□□/四巻)、故天58 (西遊記□□/四巻)、故天59 (□□□□/四巻)、故天60 (西遊記□□/四巻)
巻5	故天27 (西遊記□□/巻之五)、故天28 (西遊記□□/巻之五)、故天29 (西遊記□□/巻之五)、故天30 (西遊記□□/巻之五)、故天33 (西遊記□□/巻之五)、故天34 (西遊記□□/巻之五)、故天35 (□□西遊記/巻之五)、故天36 (西遊記□□/巻之五)
巻6	天8 ([出像西遊記] □/六≡) [故は版木の状態が非常に悪い異版で、版心表記は通常通り]、故天21 (≡之六)、故天22 (≡之六)、故天33 ([出像西遊記] □/巻之六)、故天34 ([出像西遊記] □/巻之六)
巻7	故天5 (七≡)、故天7 (□□□□/巻之七)、故天8 (七≡)、故天12 (七≡)、故天14 (七≡)、故天17 (□□□□/巻之七)、故天27 (巻之七 [七は無いようにも見える]) 天27 (巻) <sup>iv</sup> 、故天35 (□□□□/七≡)、故天67 (巻之)
巻8	故天15 (西遊記□□/巻之八)、故天57 (□□□□/巻之八)
巻9	故天1 (□□□□/巻之九)
巻10	天1 (□□□□/巻之十) [故は異版で版心通常]
巻11	天41 (版心題と巻数は通常通りだが、葉数の下に小字で「五百廿四」とある) [故はマイクロ撮影ノ影が出来てしまっており葉数とこの数字がともに確認不能だが、とりあえず天と同版なのは確か]
巻12	故天28 (□□十二 [巻之があるべき箇所が空白])、故天34 (之巻十二)、故天40 (西遊記□□/十二≡)、故天51 (出記西遊記/巻之十二)、天63 (□之十二 [巻はA面に右払いの痕跡が見えるのみ]) <sup>v</sup>
巻13	故天1 (□□□□/ [幾何学模様])、故天10 (□□□□/巻之十三)、故天65 (□□□□/ [幾何学模様])、故天45 (十三 [魚尾が二字分下がり、版心題との間は空白])、故天46 (十三 [魚尾が二字分下がり、版心題との間は空白])
巻14	故天とも乱れ無し
巻15	故天24 (西遊記□□/巻之十五)、故天13 (十五)、故天14 (十五)、故天19 (十五)、故天20 (十五)、故天21 (十五)、故天22 (十五)、故天25 (十五)、故天26 (十五)、故天27 (十五≡)、故天28 (十五≡)、故天33 (十五)、故天34 (十五)、故天43 (出像□□記/巻之十五)、故天52 (□□□□/巻之十五)、故天58 (□□□□/巻之十五)
巻16	故天5 (十六≡)、故天6 (十六≡)、故天7 (十六≡)、故天8 (十六≡)、故天33 (□□□□/□之十六 [魚尾も無し]) [天では欠葉]、故天57 (巻十六)、故天58 (巻十六)
巻17	故天7 (巻十七)、故天8 (巻十七)、故天30 (巻之十七 [魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白。なお、この葉は他より反面が一回り小さい])、故天41 (□十七巻 [魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白])、故天44 (十七巻 [魚尾が無])、故天57 (出像西□記/巻之十七)、故天58 (□巻之十七 [魚尾の下に一文字分の空欄])
巻18	故天1 (□□□□/ [幾何学模様])、故天2 (巻十八)、故天4 (□□□□/十八≡)、故天6 (□□□□/□十八 [魚尾無し])、故天10 (□□□□/十八≡)、故天11 (□□□□/巻之十八)、故天14 (□□□□/巻之十八)、故天16 (□□□□/巻之十八)、故天17 (□□□□/巻之十八)、故天29 (□□十八)、故天30 (十八 [魚尾が二文字分下がり、版心題との間は空白])、故天31 (十八 [魚尾が二文字分下がり、版心題との間は空白])、故天32 (十八 [魚尾が二文字分下がり、版心題との間は空白])、故天36 ([出像西遊記] □/巻之十八)、故天39 (□□十八)、故天40 (□□十八/四十)、故天47 (□□十八)、故天48 (□十八 [魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白])、故天50 (巻之十八 [魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白])、故天60 (□十八 [魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白])
巻19	故天1 (□□□□/ [幾何学模様])、故天60 (巻十九) [天は欠葉]
巻20	故天1 (□□□□/ [幾何学模様] 乙)、故天35 (二十巻)、故天36 (二十巻)

i 魚尾が二文字分下がり、版心題との間が空格。「[出像西遊記□□]」と表記するもの以下全て同じ。

ii 天理世本は故宮世本にある図を一つ省くので、この葉以下は同じ中身の葉で版心葉数が異なる。詳細は次頁挿図の項にて触れる。

iii 「[出像西遊記]」の五文字を四文字分のスペースに詰め込み、魚尾との間が一文字分空格となるもの、以下同じ。

iv この葉に関しては版刻の際の問題ではなく、天で版木の損壊により字が見えなくなったものの模様。天は葉数も「十七」しか見えないが、故だとA面に僅かながらその上に「二」の痕跡が確認出来る。両者は同版なので、この葉に限れば天よりも故の方が印刷が早いと言える。

v この葉、故は同版であるが、「巻」は見える。これも天が版木の損壊が進んでからの印刷だったことによる。

刊行者名に従って巻ごとに版木の由来が違うということは無いと見てよからう。<sup>(20)</sup> 版心の乱れが特定の巻に偏っているのは、巻ごとに担当する刻工が違ったなどの事情があったためだろうか。

なお、故宮世本が配本ではないとする謝文華氏とその点では結論が一致したが、謝氏は熊雲濱の行ったのは全巻の重刻ではなく部分的な補修・補版に過ぎないと看做しており（前掲論文62頁）、その点は筆者の見解と異なる。謝氏は浅野世本を未見であるため、故宮世本とは全葉が異版の本が存在する（した）という想定はしにくかったのだろう。

### （3）挿図

挿図の形式や数については「はじめに」で述べた通りで、故宮世本と日光世本が197図に対し、天理世本は195図しか存しない。故宮世本・日光世本にあつて天理世本に無い図は第4回第2図（故宮世本巻1—45 B 46 A）と第72回第2図（同巻15—23 B 24 A）だが、後者は23 A、24 Bがとも残るため、伝来の過程で図のみが切り取られたものと考えられる。<sup>(21)</sup> しかし、前者は天理世本は巻1—45 Bとして故宮世本の巻1—46 Bを重刻しており、以下の葉では必ず版心葉数を故宮世本から1を引いた数字に改めているから、刊行時から無かつたらしい。先行する版本から図を削り、以降の葉の版心葉数をその分詰めるという作業は、（ハ—2）が（ハ—1）に対して行っていたものである。しかも、前述の通り天理世本の巻1には補刻葉が目立つ。こうして見ると、これだけをもつて天理世本全体を判断は出来ないが、少なくとも天理世本の巻1に関しては、故宮世本・日光世本の巻1よりも後の刊行と見て間違いないまい。

また、天理世本に存する図は、版木の割れ目や匡郭の欠損箇所的一致具合から見て、二つを除き故宮世本と完全な同版である。問題があるのは第33回第1図（巻7—32 B 33 A）と第46回第1図（巻10—2 B 3 A）。『資料の研究』220頁と221頁にそれぞれ日光世本も含めた書影があるので参照されたい。<sup>(22)</sup> 両図は日光世本と天理世本が同じで、故宮世本だけが異なっている。これはおそらく磯部氏が天理世本が故宮世本に先行すると判断した根拠の一つではないかと思うが、紙幅の都合もあるので本論ではこれ以上触れず、記「熊雲濱重鐫」本の中での刊行の先後については判断を保留しておく。

但し、一つだけ磯部氏の説に疑問を呈しておく、日光世本は巻1の図の数及び全葉数は故宮世本と共通し、巻7、10の図は天理世本と共通している。となれば、故宮世本と天理世本のどちらが先行するかはさておき、長澤氏の説でそうであるように、日光世本は故宮世本と天理世本の間位置付けるのが妥当なのではなからうか？

なお、原則各巻2図ずつの故宮世本で挿図が無いのは、第3回及び第94回の後半と、第18回相当部分の前半である。<sup>(23)</sup> 他、故宮世本は巻13第60葉が欠葉なため第65回2図目の右半分を欠くが、これは天理世本には存する。

## 二、浅野世本

巻11から巻20までのみ存する残本。後印本だが、一部の葉を除き印刷状態はかなり良好である。磯部氏が『資料の研究』201頁にて「白綿紙が使用されている可能性が高い」とされるが、筆者もそう感じた。付言すれば、紙質はどの巻も均質であったから、伝来の過程での補配がある可能性は考えにくい。存する巻には欠葉無し。

### (1) 本文

版式は故宮世本に等しいが、全葉が異版である。浅野世本は俗字や略字をあまり使わず、記「熊雲瀆重鏤」本では俗字や略字を用いる箇所がこの本では正字であるという例が非常に多い(例えば、「変」「難」「宝」「観」に対して「變」「難」「寶」「觀」など)。世徳堂原刊の(イ)(ロ)には俗字はあまり使われないので、記「熊雲瀆重鏤」本はやはり重刻本で、浅野世本は仮に世徳堂原刊本そのものでなかったとしても、記「熊雲瀆重鏤」本に比べてより良く原刊本の趣を伝えていると考えて良からう(王少淮の名が浅野世本にのみ残ることもその一例である)。

但し、太田氏注19前掲書243頁に指摘されている通り、一部に明らかに補刻と思われる字体の異なる葉があり、そうした葉を中心に逆のケースも若干見られる(例えば、巻14—64Aで浅「宝」「无」「难」に対し故天「寶」「無」「難」)。

また、記「熊雲瀆重鏤」本との間には異体字に止まらない字句の異同も僅かながある。そうした場合、世本『西遊

記」の直系の後継版本（『唐僧西遊記』、清白堂本、三種ある李卓吾評本各種）では、浅野世本と一致する例もあれば、却って記「熊雲瀆重鏤」本と一致する例もある。巻14—64Aの浅「大風」に対して故天「天風」は後者の一例。

版心表記に関しては次頁表6の通り。記「熊雲瀆重鏤」本で乱れが多い巻15に全く乱れが見られないなど、記「熊雲瀆重鏤」本と比べて版心表記の統一度は遥かに高い。しかし、巻17、18の版心題・版心巻数の乱れの多さは、前章で見た世徳堂刊本の特徴に照らして考えると、浅野世本が全面的に世徳堂原刊の版木を使っていると断ずることを躊躇させるには十分な量である。しかも、浅野世本の版心表記の乱れの殆どは、記「熊雲瀆重鏤」本と一致している。どの葉でも両者は例外なく異版ではあるが、字の細かい形まで非常に良く似通う葉も多く、少なくともそうした葉では両者の間には直接の覆刻の関係を想定したい。だが、ならば何故一部の巻にのみ版心の乱れが一致する葉が含まれ、他の巻では記「熊雲瀆重鏤」本だけに版心の乱れが見られるのだろうか？

更に、前記のうち巻17では、記「熊雲瀆重鏤」本で正字体である字を浅野世本が略字としている例が散見される。こうなると、記「熊雲瀆重鏤」本が単純に浅野世本を覆刻したというわけではなさそうだ。逆に、こうした巻については浅野世本の方が記「熊雲瀆重鏤」本によって補刻したために一致が生じた、と考えることも必要かもしれない。

浅野世本が記「熊雲瀆重鏤」本によって補刻した葉を含む可能性は、巻16—1Aからも窺える。浅野世本の各巻巻頭第3行は巻16を除き故宮世本に同じなのだが、巻16だけは何も記さない。巻16—1Aは2行目と3行目の間の界線が、ちょうど記「熊雲瀆重鏤」本で「書林熊雲瀆重鏤」とある高さのところだけ途切れているので（次頁図1—3）、そこにあつた何らかの文字を削り取ったものと見て間違ひなからう。磯部氏はこれについて「浅野本巻十六の刊記については、熊雲瀆重鏤を削除した重刻本という見方も出来る。しかし、世徳堂名などを残し、熊雲瀆名を削って空欄とした理由は十分説明できない。浅野本で削った空欄を、熊雲瀆が自名で埋めたのではないか」（『資料の研究』<sup>213</sup>頁）と述べられるが、そう考えた場合、今度は浅野世本が巻16に限って刊行者名を削った理由が分からなくなるのではないか。やは

表6 浅野世本の版心表記が通常でない葉

- ・「葉数表記の原則」欄は、「20葉以降の表記／下一桁の1の表記」の順に記す。他の葉数表記に問題がある場合はそれに続けて記す。
- ・「版心題・巻数」欄は、版心題と巻数のうち乱れがあるもののみに記す。それに続けて、空格・誤字・埋木の跡等が見える場合はその旨を、他の葉でよく用いる字とは異体字で表記される字があるのに気付いた場合はその字（続く〔 〕内には他の葉で多く用いられる字）を記す。
- ・記「熊雲演重録」本と特徴が共通する事項には網掛けにし（例えば、巻12～34は版心題を「之巻十二」とするのは故天と同じだが、故天は「変」ではなく「變」を用いているということ）、故宮世本・天理世本でも表記が乱れるが浅野世本とは乱れ方が異なる事項には下線を付した。

	葉数表記の原則	版心題・巻数・特記事項
巻11	全て「二五」式／11のみ	40（葉数の下に小字で「五百廿七」とある）、41（葉数の下に小字で「五百廿四」とある）
巻12	全て「二五」式／11は十口、 他は全て乙	28（□□十二）、34（之巻十二／変（變））
巻13	全て「二五」式／全て一	45（十三【魚尾が二文字分下がり、版心題との間は空白】／台【臺】）、46（十三【魚尾が二文字分下がり、版心題との間は空白】）
巻14	全て「二五」式／41のみ乙／34は二四に見える	乱れ無し
巻15	全て「二五」式／21のみ乙	乱れ無し
巻16	全て「二五」式／全て一	乱れ無し
巻17	21～29「二十五」式、以降は冊七、冊八を除き「二五」式／21、41、51が一	5（出像西遊記□【五文字を四文字分に詰め込む】／舊個【个く】）、7（巻十七／舊【興】、変ヒ【變く】）、8（巻十七／團ヒ【團く】、舊【舊】）、30（魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白、他の葉より版面が一回り小さい）、41（□十七巻【魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白】／灯【燈】、親【親】）、44（□□十七巻【但し故天と違い魚尾あり】／A面11行目の故天「叫」とする字が見えず、埋木の跡がある）、58（□巻之十七【魚尾の下に一字分の空欄】）
巻18	全て「二五」式／11、41が一を用いる	1（巻十八【A面1行目、故天の「尋」が空格】）、2（巻十八）、6（□□十八【魚尾が無】／国【國】）、29（□□十八）、30（十八【魚尾が二文字分下がり、版心題との間は空白】／A面3行目、故天の「待」が空格。故天は俗字多用）、31（十八【魚尾が二文字分下がり、版心題との間は空白】）、32（十八【魚尾が二文字分下がり、版心題との間は空白】／A面2行目「降妖寶杖」とすべきを「降妖寶劍」に誤る。B面12行目、故天の「佛人」を「弗人」に誤り、かつ埋木の跡が見える）、36（出像西遊記□【五文字を四文字分に詰め込む】）、37（□□十八／故天の「体」を「體」とする反面、「鐵」を「鉄」とする）、38（□□十八／故天の「親」を「親】）、39（出像西遊記／□□十八／故天は俗字を多用）、40（□□十八／故天は俗字を多用）、47（□□十八）、48（□十八【魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白】／故天「乱」を浅「亂」）、50（魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白／故天「戦」を浅「戰」）、60（出像西遊記／□十八【魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白】／A面8行目、故天の「く」が空格）
巻19	冊七、冊八を除き「二五」式／11のみ	乱れ無し
巻20	全て「二五」式／11、51が一	乱れ無し

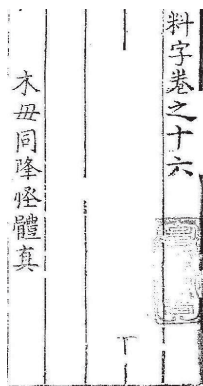


図1 浅野世本巻16-1A(部分)

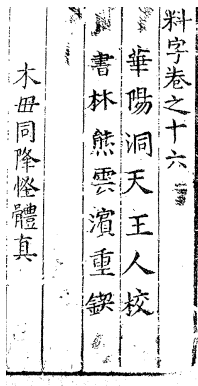


図2 故宮世本巻16-1A(部分)

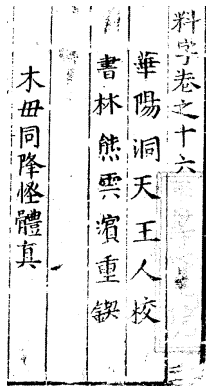


図3 天理世本巻16-1A(部分)

り、この巻にだけ熊雲瀆の名が見えるために削った、と考えるのが自然であるように思う。磯部氏が「十分説明できない」とするその理由については、熊氏と言えは建陽の書林として名高く、当時建陽の刻書と言えは胡応麟『経籍会通』巻四（『少室山房筆叢』巻四）に「余所見当今刻本……閩本最下」とあるように粗悪本の代表の如く言われていたからではなからうか。対して、金陵刻本は良質というイメージから、金陵世徳堂や金陵榮壽堂の名は商品価値を高めるものだったために残された——こう考えることは出来ないだろうか。浅野世本の巻16巻頭は記「熊雲瀆重鏤」本とは異版であるから、一旦熊雲瀆の名まで忠実に覆刻した版本を作った上で、後に熊雲瀆の名を削ったのであろう。<sup>(24)</sup>

以上の分析から、「浅野世本は基本的には世徳堂原刊本の重印或いはそのかなり忠実な覆刻本であるが、一部の葉は記「熊雲瀆重鏤」本を覆刻して補ったものである」という可能性を指摘しておきたい。

## (2) 挿図

こちらにも全葉が記「熊雲瀆重鏤」本とは異版。一部に明らかに記「熊雲瀆重鏤」本より彫りの稚拙な図がある。一例として巻14—53 B 54 Aを記「熊雲瀆重鏤」本と比べてみよう（次頁図4〜6）。54 A左上の孫行者の顔と左手に注目されたい。浅野世本は明らかに覆刻と分かる彫りで、却って記「熊雲瀆重鏤」本の方が精巧である。同じ葉のもう一人（賽太歳）の両手も同様だ。極端な言い方をすれば、この葉は記「熊雲瀆重鏤」本を覆刻して浅野世本を作ることとは容易だが、逆は困難であると言えよう。やはり浅野世本は全面的に初刻本と看做すには問題があるようだ。

浅野世本を初刻本と看做す立場からは問題となる点をもう一つ挙げよう。巻17—36 B 37 A（次頁図7）、巻19—29 B 30 A（次頁図8）、同41 B 42 Aの三図は左右の面で図柄が繋がっておらず、巻17—29 B 30 Aは構図が他より単純で彫りも稚拙である。しかも、巻17第30、37葉は版面が他の葉より小さい。上記の問題は記「熊雲瀆重鏤」本でも同様であるが、このような不自然な図は他の世徳堂刊本には全く見られない。つまり、これらの図は浅野世本・記「熊雲瀆重鏤」本の両者がともに原刊本の様相を伝えていない疑いがあるのだ（無論、原刊本でもそうだったかもしれないが）。



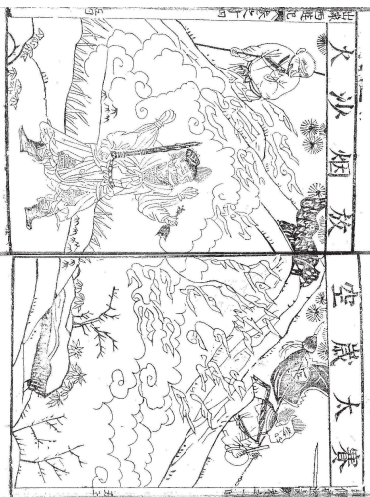


図4 浅野世本巻14-53B54A (第70回第1図)

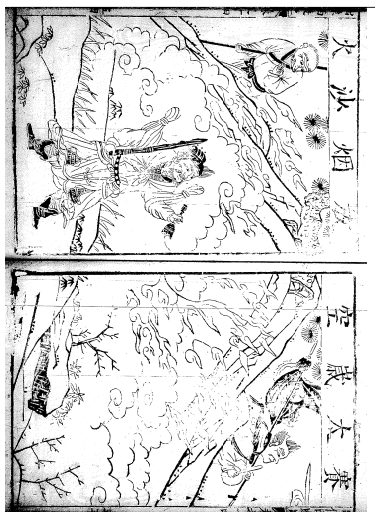


図5 故宮世本巻14-53B54A (第70回第1図)

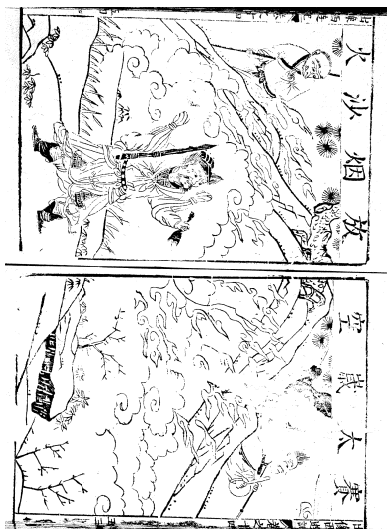


図6 天理世本巻14-53B54A (第70回第1図)

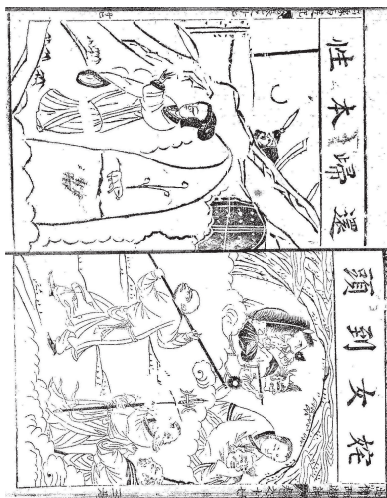


図7 浅野世本巻17-36B37A (第83回第2図)

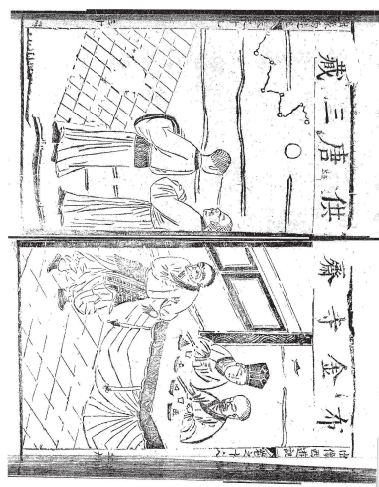


图8 浅野世本卷19-29B30A (第93回第1图)

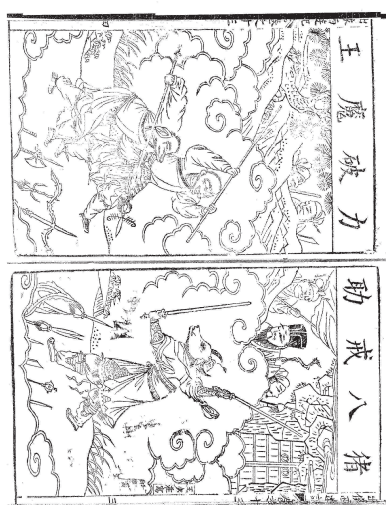


图9 浅野世本卷13-3B4A (第61回第1图)

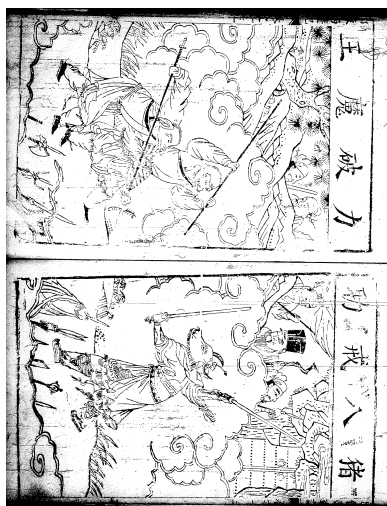


图10 故宫世本卷13-3B4A (第61回第1图)

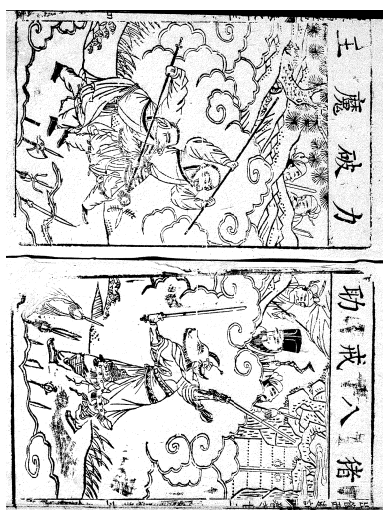


图11 天明世本卷13-3B4A (第61回第1图)

但し、記「熊雲瀆重鏤」本、浅野世本ともに殆どの図は見事な出来栄えて、どちらの刻工も確かな腕だったことを窺わせる。その一例として、浅野世本に王少淮の署名が見える図を挙げておく（前頁図9～11）。ただ、この図にも実は問題がある。浅野世本は孫行者の金箍棒や猪八戒の九齒釘耙など武器の柄を全て陽刻にしているが、浅野世本自身と記「熊雲瀆重鏤」本も含め、王少淮写像の図では武器の柄は陰刻とする例が圧倒的に多いのだ。陽刻とする例が他に全く無いわけではないので直ちに浅野世本が初刻でない証拠とはならないが、怪しいと思い始めると3B左上の人物の顔も浅野世本ではやや稚拙なような気もしてくる。今後の検討課題としたい。

### おわりに

結局不明の点が非常に多く残ってしまったが、以上の検討から分かったことをまとめて小結とする。

まず、記「熊雲瀆重鏤」本は全巻が建陽での重刻で、徐朔方氏の説のような巻ごとの配本ではない。刊行者熊雲瀆（体忠）の活動年代や、唐氏世徳堂が彼の同族である熊大木撰の小説を多く刊行している縁を考えると、万暦20年の世本『西遊記』原刊本の刊行からほどない時期に、世徳堂から正式に重刻の権利を認められて刊行されたものと思われる。

一方、浅野世本は版心表記の乱れや俗字の少なさなど、記「熊雲瀆重鏤」本より世徳堂原刊本に近いと思われる特徴が多く、挿図には画工名（王少淮）を残す。しかし、巻16巻頭第2、3行の削除や、一部の巻での版心表記の乱れの多さとその記「熊雲瀆重鏤」本との一致、一部の挿図の彫りの稚拙さなどから、全面的に世徳堂原刊本の版木を用いたものとは看做し難いし、記「熊雲瀆重鏤」本との関係も片方が片方の覆刻と言い切れるような単純なものではないらしい。

浅野世本が世徳堂原刊本の版木を利用した補修重印本なのか、それとも記「熊雲瀆重鏤」本とは異なる重刻本だったのかについては、記「熊雲瀆重鏤」本とのより詳細な字句や図面の比較を行った上で、直系の後続版本に直接影響しているのがどちらであるかの検討なども含めた多角的な視点で判断すべき問題であり、今後の検討課題としたい。

## 注

- (1) 略称を単に「〇〇本」とせずに「〇〇世本」としたのは、日光輪王寺慈眼堂と広島市立中央図書館浅野文庫が他にも『西遊記』の明刊本を所蔵しており、『西遊記』の版本について全体的な考察を行う際にその区別が必要になるため。
- (2) 高崎藩大河内家の旧蔵書が村口書店を経て一九三三年到北京図書館(現・国家図書館)の前身である北平図書館に入り、大戦中に他の善本とともにアメリカに移管され、一九六五年に台湾に渡ったもので、実際には北京図書館に入っていない。アメリカで撮影された「旧北平図書館善本書膠片」が国家図書館や日本の国立国会図書館などに蔵され(本稿は後者蔵膠片による)、上海古籍出版社『古本小说集成』に影印も取めるため、日本所蔵で影印本も無い他の三本より広く利用されている。
- (3) 同氏「世徳堂刊西遊記の版本研究」(『東北大学文学語学論集』第10号、二〇〇五)を改題の上加筆修正したもの。
- (4) 但し、天理世本と故宮世本の前後については磯部氏自身が『資料の研究』212頁の注7にて、これと逆に見える葉もあり結論に疑問の余地が残ることを述べ、現存諸本が配本である可能性も含めて更なる検討を要する課題とされている。
- (5) 国立公文書館で紙焼き複写を閲覧。書誌的には『新刊出像補訂参采史鑑南宋志傳通俗演義題評』10巻50回と『新刊出像補訂参采史鑑北宋志傳通俗演義題評』10巻50回の合刻だが、内容は一繋がり。仮に後世附された表紙に書かれた題を総称とした。
- (6) 巻首題『新刊出像補訂参采史鑑唐書志傳通俗演義題評』。中華書局『古本小说叢刊』第二八輯所収の影印本によった。尊経閣文庫にも同版本を蔵することだが、未見。また、周氏大業堂による一部の版心に「世徳堂刊」の文字を残した重印本もあるとのこと、本論の趣旨からは参照すべきであったが、未見。
- (7) 北京大学の潘建国教授のご厚意により、記載したデータをお調べ頂くとともに、撮影の申請を代行の上で若干の書影をお送り頂いた。この場を借りて厚く御礼申し上げる次第である。(イ)と同様に書誌的には西晋と東晋で別書名であるが、共通の目録に『新鐫重訂出像註釋通俗演義東西兩晉志傳題評』と題する。世徳堂原刊の版木を用いた重印本であろうというのが潘氏の見解で、(ハ―ニ)の影印本の李夢生「前言」や、大塚秀高「嘉靖定本から万曆新本へ」(『東洋文化研究所紀要』第百二十四冊、一九九四)も同様の判断。但し、潘氏によると一部に字体の異なる葉や彫りが些か劣る図があるとのこと(筆者もお送り頂いた書影で確認した)、部分的に補修や補刻が施されていると思われる。それらの作業はおそらく周氏大業堂によるものだろう。
- (8) 孫楷第『中国通俗小説書目』57年版(作家出版社、一九五七)に「万曆四十年」と記され(82年版でも同じ)、数多くの論



文・書目が踏襲するが、実際は刊年に関する記載は一切見られない（潘氏のご教示及び大塚氏前掲論文による）。（ハ―２）や、その他の同版とされる本に関する報告からも「万曆四十年」の根拠は見出せない。刊年不詳としておくのが穏当であろう。

- (9) 『古本小説集成』所収の影印本によった。東晋卷4第65葉以降と、同卷5く8の全葉が（ハ―１）とは異版の補刻葉なので（字体が明らかに異なるほか、眉批と挿図を全て省いている）、（ハ―１）の補修本と分かる。周氏大業堂の名を記す西晋卷1第1葉からして（ハ―１）の覆刻で（この葉B面は図だが、明らかに覆刻と分かる稚拙さである）、他にも（ハ―１）と版の異なる補刻葉があると思われるが、（ハ―１）を実見していないので未調査。

- (10) 『古本小説叢刊』第三輯所収の影印本によった。他の世徳堂刊本とは字体・風格が明らかに異なる。仮に同「前言」に従って王慎脩による世徳堂本の重印本としたが、逆に王慎脩重刊本の版木を用いて金陵世徳堂が重印したものとの説もある。世徳堂の関与が認められるという観点から表に入れたが、表内の他の版本とは性格を異にする。巻1全葉と巻2第17葉までは清代の書坊による補刻とされる。北京大学図書館にも同版本を蔵することだが、未見。

- (11) 原本を閲覧した。内閣文庫は完全に同版の二本を蔵するが、封面を存するのは林家旧蔵の一本のみ。

- (12) 齊魯書社『四庫全書存目叢書』に影印を収める国家図書館蔵15巻本（10行20字）が封面に言う「北京原板」である可能性があるが、詳細不明。唐氏世徳堂刊本で「北京原板」を謳う例は、管見の範囲では他に封面に「（頭二字欠損、）萬曆」か？辛丑（万曆29年）秋月唐氏世徳堂遵依北京梓行」と見える「皇明典故紀聞」（東京大学東洋文化研究所蔵）がある。

- (13) （ハ―ト）はともに故宮世本同様国立国会図書館東京本館図書課第一別室所蔵の「旧北平図書館善本書膠片」によった。

- (14) 既に多くの指摘があるが、謝文華氏前掲論文第二章第四節「陳元之與陳氏尺蠖齋」（25く27頁）が最も詳しい。

- (15) なお、（ロ）の「万八刊」（表2参照）につき、『古本小説叢刊』第二八輯「前言」は「万曆八年刊」の略と看做すが、この版本の刊行者・序に記載の年・評釈者・画工・版式が全て万曆21年序の（イ）と同一であることを考えると信じがたい。万曆後期から崇禎にかけての挿図刻工として名高い劉素明に「素明刊」と署名する例が多数あるから、この「万八」は刻工名ではなからうか。金陵刊本で画工名と刻工名が別々に見える例としては、万曆19年周日校万卷楼原刊「新刻校正古本大字音釋三国志通俗演義」の巻1第1図に「上元泉水王希堯寫」、巻2第1図に「白下魏少峰刻」とある。王希堯は姓・籍貫ともに王少淮と同じで、画風も殆ど同じと言って良いほど酷似している。一族で画工を生業としていたのだろう。

- (16) 大塚氏は熊大木の関与した嘉靖刊本を「嘉靖定本」と、金陵刊本と余象斗刊本を「万曆新本」とそれぞれ称する。

- (17) なお、万暦年間に活動した書林金陵唐氏は、他に万暦24年刊『歷朝翰墨選註』（上海圖書館藏本の影印を『四庫全書存目叢書』に収める）に「繡谷□唐廷仁□國壽父□校梓」と署名する唐廷仁や、大量の戯曲を刊行したことで名高い唐氏富春堂主人などもおり、後者は多くの葉の版心に「德壽堂梓」と見える『新編古今事文類聚』を「金陵□□唐富春□□子和□□刊」の署名で万暦甲辰（万暦32年）孟春に「補遺重刻」してもいる（内閣文庫藏本の封面には「雲林唐積秀梓行」とある）。唐晟・唐景兄弟も含め上記のうち何人かは号や別字、改名などの関係で実際は同一人物かもしれない（世德堂主人と富春堂主人には既に同一人物説がある）。唐晟と唐景の字を見るに少なくとも間にもう一人兄弟がいそうだが、それらの考察は今後の課題としておく。しかし、いずれにしても磯部氏の推定通り榮壽堂が唐氏の書坊で世德堂の共同刊行者であった可能性は高いように思う。
- (18) 明白に建陽刊本と知れる明刊百回本『西遊記』だけでも、癸卯（万暦31年）序、「閩建書林楊氏梓」の清白堂本（内閣文庫蔵）、「崇禎辛未歲（崇禎4年、一六三一）閩齋堂楊居謙梓」の閩齋堂本（慶応義塾図書館蔵）に多くの例が確認出来る。また、連牌本記を用いることから建陽刊本かと疑われている刊年不詳の書林朱繼源刊本『唐僧西遊記』（日光輪王寺慈眼堂、叡山文庫、国立国会図書館蔵）でも多用されている。

(19) 詳細は太田辰夫『西遊記の研究』（研文出版、一九八四）十二「世德堂本西遊記（世本）考」242頁を参照。

(20) 但し、注4に紹介した中で磯部氏が想定されているような、部分的な補配の可能性まで否定するものではない。

(21) この図は猪八戒が七人の蜘蛛精の入浴に乱入する場面を描き、裸の女性が並ぶエロチックなもので、もともと寺院に所蔵されていたこの本では、真面目な僧侶により修行の妨げとして故意に取り去られたのであろう。

(22) 但し、同書初版第1刷では後者を誤って「巻十五 第72回」と記載している。

(23) 第18回だけは本文内に回数・回目を表記する行が無く、見かけ上は他の倍の分量の第17回の次に第19回がある形になっている（目録では第18回の回目も示されている）。この現象は『唐僧西遊記』や清白堂本も引き継ぐ。

(24) 浅野世本は後印本なので、後印の際の処置であつたかもしれない。なお、巻数表記を幾何学模様にしたたり、「巻」字を略字とするなどの建陽刊本に特徴的な現象が浅野世本では一切見えないため、「浅野世本こそ熊雲濱重刻本の初刻後印本で、現存の記『熊雲濱重刻』本は浅野世本より早印の熊雲濱重刻本からの覆刻である」という可能性は考えにくい。

(25) 浅野世本の残欠部分では巻9—64 B 65 A、巻10—48 B 49 Aも若干繋がりが悪い（但し、前者は意図的に半葉ずつ地上と空中を分けて描いた構図の可能性あり）。これら以外の191図は見開き左右の葉が背景の線まで綺麗に繋がる。